

FIFA第22回サッカーワールドカップカタール大会は、アルゼンチンが3回目の優勝を遂げて閉幕しました。約1か月間、世界中の人々がこの大会に釘付けになりました。母国の試合に、あるいはお気に入りのチームの戦いぶりに一喜一憂し、日本では寝不足の人も多かったのでは？

さて、本校では“熱い戦い”、「クラスマッチ」が行われました。16日（金）は高校生、17日（土）は中学生がドッジボールと卓球に挑みました。それぞれ学年の枠を超えて行われましたが、下級生が上級生を破るという試合結果もありました。コロナ禍にあって、クラスが一致団結して競技に応援に心振るわず機会が少ないですが、この日ばかりはそれなりの声を発しながらの熱い一日となったようです。（写真は、中学3年生女子の試合前の様子。）



## チーム力が求められるとき

サッカーワールドカップカタール大会、日本は予選リーグにおいて、ドイツとスペインにそれぞれ2-1のスコアで勝利するという歴史的勝利、快挙を成し遂げました。引き分けてあれば御の字という大方の予想を覆したのです。“ブラボー!!”と叫ぶ長友選手。1か月早ければ流行語大賞獲得間違いなしでした。日本は決勝トーナメントに進出しましたが、惜しくもPK戦でクロアチアに敗れ、悲願のベスト8には届きませんでした。この躍進の要因はいったい何だったのでしょうか。

大きな要因は、登録メンバーのほとんどが国内Jリーグではなく、ドイツなどの海外リーグでスキルを磨き上げており、その経験値が生かされているということでしょう。また、かつては中田英寿や本田圭佑などといった抜きん出たスター的な選手に頼るのではなく、個性的な選手と視野の広い堅実な選手が融合し、相互にリスペクトし合ったことによって、「チーム力」が格段と向上したからなのではないでしょうか。勿論、森保監督という素晴らしいリーダーがそのまとめ役であったことには疑いの余地はありません。

日本代表元監督の岡田武史さんは中国新聞（12月21日付）の記事の中で、「今大会を通じて、多くの人々がスポーツの価値に気づいたと思う。数字では表せない共感、一体感、信頼といったものが、これからの時代は大事になる。それを証明してくれたワールドカップでもあった」と述べている。仲間同士が共感し合う、一体感を重要視する、信頼するとかリスペクトするという感覚を大切にしようといったことが「チーム力」の指標であり、時代が求めているものであると読み取ってみたいと思います。

2人でも10人でも、クラスでも、部活動でも、どんな組織でもチームとしての一体感や信頼関係を深めることによって、課題を解決し、壁を突破していくことに繋がっていく、ということなのです。サッカーワールドカ

ップから、日本代表の躍進からこんなことを感じる事ができました。

11月25日、本校で「公開研究授業」が行われました。約60名近い他校の先生方や大学生のみなさんが来校してくださいました。実施後、大学生のみなさんから感想をいただきました。その中に、「下校中の生徒が私たちに明るく挨拶をしてくれました。学校の雰囲気の良いを感じました。学校に入ると、そのことがさらに感じられました。また、協創の先生方も明るく元気な挨拶されており、先生方が率先して生徒の見本となっているのだろうと想像されました」という文が複数ありました。研究授業以外の生徒は下校していましたが、下校途中の生徒に出会った大学生が感激したということでした。こうしてお褒めの言葉をいただいて、とても嬉しい限りです。

折に触れて生徒には話していますが、挨拶は誰にでもできる素晴らしい習慣の一つです。人は人と繋がって初めて自分が生かされていきます。また、一人ではできないことが、人と繋がることによって成しえ、そのことの価値や尊さを実感することができます。だからこそ、人と繋がる第一歩は「挨拶すること」と「素直にお礼の言葉が言えること」です。それは本校の建学の精神「報恩感謝・実践」そのものなのです。

建学の精神に基づいて生徒も我々教員も学校生活を全うすること、いわゆる学校全体が一つのチームとして成長していくこと。そのためには、同方向のベクトルに向かって生徒と教師が相互にリスペクトし合い、高め合うという「チーム力」を育まなくてはならないのです。その芽はとうとう出ています。大輪の花にするには学校全体の「チーム力」の向上を図ることにあります。

新年、新年度に向けて、協創として更なる「チーム力」が求められる、そのときが来ています。